

了賢撰『他師破決集』 訳注（七）——卷第二ノ一——

別 所 弘 淳

はじめに

『他師破決集』の撰者である侍従僧正了賢（一二七九～一三四七）は、『仁和寺諸院家記』（心蓮院本¹）には、了賢僧正 侍従、毛利時賢子、了遍僧正御附法、東寺・仁和寺・大覚寺等学頭、附法八人と説かれ、また同じく『仁和寺諸院家記』（恵山書写本²）には、

了賢僧正 侍従、毛利親宗子、了遍僧正附法、仁和寺・大覚寺等学頭、正安元年十一月十九日、於菩提院道場、対大僧正了遍受灌頂、色衆八口、教授前大僧正禪助、但別座、貞和三年 月 日、入滅

と説かれるように、毛利時賢、あるいは毛利親宗の子³であり、正安元年（一二九九）に仁和寺菩提院において了遍（一二三四～一三二一）より灌頂を受け、東寺・仁和寺・大覚寺の学頭となった学匠である。

また、その主著『他師破決集』は、『真言宗全書』解題によれば⁴、他宗の諸学匠（徳一・道詮・珍海・最澄・円珍・安然・兼証・淡海三船等）が東密の教義等に対しておこなった疑難を破するための書であり、三十一の条目で構成されている。巻二の奥書には、「元徳三年正月日、依^二大覚寺殿仰^一注^三進之^一。法印権大僧都了賢⁵」と記され、また、巻五の奥書には、「正慶元年五月日、依^二大覚寺殿仰^一注^三進之^一／法印権大僧都了賢⁶」とある通り、元徳三年（一一三三）、正慶元年（一一三三）の頃に「大覚寺殿⁷」の仰せによって撰述されたものである。

『他師破決集』は、先行研究では、主に徳一の『真言宗未決文』に対する反駁書として取り扱われているが、それ以外の諸学匠に対する反駁が扱われた論稿はほとんどなく、または部分的に取り上げられるのみであり、了賢や『他師破決集』自体を扱った研究は全くないといっても過言ではない。

そこで『他師破決集』の全体像を把握することを目的として、訳注を行うこととした。この訳注において用いるのは、「承応二年刊本」を底本、「仁和寺蔵古写本」を対校本とした、『真言宗全書』巻二一
所収の本である。

凡例

- 一、本稿は、了賢撰『他師破決集』の【原文】に、【訓読】・【典拠】・【解説】を施したものである。
- 二、【原文】は、詳細な【解説】を施すことができるように、条目を更に細かく区切ることにした。尚、【訓読】を表記しているため、【原文】に返り点を付すことはしなかった。
- 三、条目には、『真言宗全書』解題（二二七頁上～二二八頁上）にしたがって通番号を付した。巻第二ノ一に収録される条目は次の通り。
- 七、真言宗鉄塔相承耶事（前半部）
- 四、【原文】については、いわゆる異体字の類も含め、原則として通行の字体に改めた。また踊り字も元の字体に改めた。中略を示す「○」については【原文】【訓読】ともに「……（中略）……」と標記した。
- 五、【訓読】は、通読の便を考慮し、文意に応じて適宜改行し、段落を設けた。漢字は原則として通行

の字体を用いた。また書名は原則として『』で囲い、引用文も「」で囲った。また割注にはへゝを付した。

六、【典拠】における主要引用文献の略号は以下の通り。

『大正新脩大藏經』↓大正、『弘法大師全集』↓弘全、『大日本仏教全書』↓仏全
『真言宗全書』↓真全、『続天台宗全書』↓続天全、『新訂増補国史大系』↓国大

七、【解説】は、関連する事柄について言及しながらも、できる限り現代語訳することに努めた。

訳注研究

【原文】

真言宗鉄塔相承耶事

徳一未決云、鉄塔疑者、習真言宗徒伝云、真言宗所馮経論、是釈迦如来滅度後八百年中、龍猛菩薩、入南天鉄塔受金剛薩埵。問。誰伝如是。為有文伝、為是口伝耶。答曰、金剛智説。亦問。若金剛智三蔵説者、

又疑。為是口伝、為有文伝。若言口伝非文伝者、不足信受。若有文伝者、請、示其文。此疑未決。……
（中略）……辺主云、瑜伽論等は無著菩薩独一聽受。都無同聞衆。不足信受。何故举世奉行。以此論疑例
鉄塔疑建立彼宗。今決此疑云、唯識了義灯第一云、安達羅国王、請陳那菩薩証無学果。菩薩撫之欲遂王請。
文殊師利、於虚空中彈指驚曰、云何捨大心而期小果。可製因明、以弘慈氏所説瑜伽論。菩薩、敬受指誨、
奉以周旋。遂作正理門論。因明疏云立（亦同之）因爾。此言周遍五天竺、無有一人不聞不知。如何更致疑文。

道詮群家諍論上云、夫真言宗者、近代所伝未詳所師。彼宗是三論之支流耳。唐朝不空未詳何許人也訳大毘盧
遮那經七卷及金剛頂經、蘇悉地經、專以為宗簡。彼宗人伝述、天竺・晨旦相承師資。而無經論誠証。故
未足取信文。

又云、彼宗所言報仏説法、以性空為門、顯道理。理不空。如是專義、法相相似。彼宗、云以龍樹為本師。
未詳所由文。

【訓読】

真言宗は鉄塔相承なるやの事

徳一の『未決』に云く、「鉄塔の疑とは、真言宗を習う徒の伝に云く、真言宗所馮の経論は、是れ釈
迦如来滅度後八百年中に、龍猛菩薩、南天の鉄塔に入つて金剛薩埵に受くと。問う。誰か是の如く伝う。
文伝有りとや為ん、是れ口伝とや為ん。答えて曰く、金剛智の説なり。亦た問う。若し金剛智三蔵の説

ならば、又疑う。是れ口伝とや為ん、文伝有りとや為ん。若し口伝にして文伝に非ずと言わば、信受するに足らず。若し文伝有らば、請う、其の文を示せ。此の疑未だ決せず。……(中略)……^②辺主の云く、『瑜伽論』等は是れ無著菩薩独一に聴受す。都て同聞衆無し。信受するに足らず。何が故ぞ世挙つて奉行する。此の論の疑を以て鉄塔の疑に例して彼の宗を建立す。今此の疑を決して云く、『唯識了義灯』^③第一に云く、「安達羅国王、陳那菩薩に無学果を証せんことを請う。菩薩之れを撫して王の請を遂げんと欲す。文殊師利、虚空中に於て彈指して驚かして曰く、云何が大心を捨てて小果を期す。「因明」を製して、以て慈氏所説の『瑜伽論』を弘むべしと。菩薩、敬て指誨を受け、以て周旋し奉る。遂に『正理門論』^④を作る」と。『因明疏』^⑤にも亦た同じく爾なりと云う。此の言は五天竺に周遍し、一人として聞かず知らざる有ること無し。如何が更に疑を致さん」と文り。

道詮の『群家諍論』^⑧上に云く、「夫れ真言宗とは、近代の所伝にして未だ師とする所を詳らかにせず。彼の宗は是れ三論の支流なるのみ。唐朝の不空三蔵^⑨へ未だ何許の人なるか詳らにせず。訳の『大毘盧遮那経』七巻及び『金剛頂経』、『蘇悉地経』を、専ら以て宗簡と為す。彼の宗の人の伝に述ぶるに、天竺一晨旦に相承師資す。而も経論の誠証無し。故に未だ信を取るに足らず」と文り。

又云く、「彼の宗に言う所の報仏説法は、性空を以て門と為し、道理を顕す。理は空にあらず。是の如くの専義、法相に相似す。彼の宗、龍樹を以て本師と為すと云う。未だ所由を詳らかにせず」と文り。

【典拠】

- (1) 徳一の『未決』：徳一撰『真言宗未決文』（大正七七・八六五頁上〜中）。
- (2) 辺主：この辺主は弘法大師空海（七七四〜八三五）を指すと思われる。空海撰『秘密曼荼羅教付法伝』（以下、『広付法伝』）巻二（弘全一・四七頁）に、「又如汝言、瑜伽論不_レ合_二信受_一。何者斯論者、西域記云、如来滅後一千年中有_二菩薩、名_二無著_一。夜昇_二天宮_一、於_二慈氏菩薩所_一受_二瑜伽師地論・莊嚴論・中辺分別論等_一。昼為_二大衆_一講_二宣妙理_一。又或曰、弥勒夜分下_二無著室_一説_二此論等_一。無著聞受時、曾無_二同聞人_一。何故拳_レ世奉行乎」とあることを指すと考えられる。
- (3) 『唯識了義灯』第一・恵沼『成唯識論了義灯』巻一本（大正四三・六六六頁中）。
- (4) 安達羅国：玄奘『大唐西域記』巻一〇（大正五一・九三〇頁上〜中）に「案達羅国南印」「陳那罽越菩薩」於_レ此作_二因明論_一とあり、また『成唯識了義灯』巻一本と同内容の記述も確認することができる。
- (5) 陳那菩薩：Dignāga のこと。童授、大域龍菩薩などとも称される。
- (6) 『正理門論』：陳那撰『因明正理門論』を指す。漢訳に玄奘訳『因明正理門論本』一卷（大正三二・一六二八番）、義浄訳『因明正理門論』一卷（大正三三・一六二九番）がある。
- (7) 『因明疏』：慈恩大師基撰『因明入正理論疏』を指すか。『因明入正理論疏』巻上（大正四四・九一頁下）に、「時彼南印度案達羅国王、見_レ放_二光明_一、疑_レ入_二金剛定_一、請_二証_一無学果。菩薩曰、入_レ定觀察、將釈_二深経_一。心期_二大覚_一。非_レ願_二小果_一。王言、無学果者諸聖攸仰。請、尊速証。菩薩撫_レ之、欲

レ遂ニ王請。妙吉祥菩薩、因彈指警曰、何捨ニ大心ニ方興ニ小志。為ニ弘利益ニ者、当レ伝ニ慈氏所説瑜伽論。匡ニ正類綱、可下制ニ因明ニ重成中規矩上。陳那敬受ニ指誨、奉以周旋。於レ是覃思研精、作ニ因明正理門論」と、『唯識了義灯』の文とほぼ同文がみられる。

(8) 道詮の『群家諍論』上…三論宗の道詮(？)八七三、一説、八七六没)の著作。道詮については、『法隆寺記補忘集』(『続々群書類従』一・四九七頁上)下)、『本朝高僧伝』卷七(仏全一〇二・二二八頁下)一二九頁下)等にその伝記がみられる。道詮に関する史料については、末木文美士『三國仏法伝通縁起』日本三論宗研究(『東洋文化研究所紀要』九九・一九八六)に詳しい。また、末木氏は道詮並びに『群家諍論』について次のように述べている。「道詮(八七三/六)は三論宗の学者で、富貴寺に住し、また法隆寺の復興に尽した。その著『群家諍論』は三論宗の立場から諸宗を批判したもので、一時終息したかに見えた平安初期の諸宗の論争に改めて火を付け、天台の蓮剛が『定宗論』を著してそれを批判し、さらに安然の『教時諍』『教時諍論』もそれを批判の対象としている。本書は散逸したとされているが、名古屋の大須文庫(真福寺文庫)に『群家諍論撮要』の名で冒頭部のみ写本の断簡が残っている(『平安初期仏教思想の研究—安然の思想形成を中心として—』(春秋社・一九九五)二四七頁)。

さらに、亀山隆彦「安然の著作にみる道詮『群家諍論』の意義—『教時問答』の「真言教」理解を中心に—」(『密教文化』二四三・二〇一九)では、「道詮『群家諍論』では、三論宗の仏教史的意

義について以下のように断言する。すなわち、法相・華嚴・天台・真言の四宗何れも、例外なく龍樹 (Nagarjuna、一五〇～二五〇頃) を祖師の一人に数えている。したがって、それら宗派はすべてからく中観＝三論宗の支流と理解される」と述べている。本条目はあくまでも鉄塔相承に関するものであるが、ここで展開される了賢の主張は、広い意味において、このような道詮の真言密教への見解に対する反論であるともいうことができよう。

(9) 不空三蔵・『群家諍論』において道詮は、『大日経』・『金剛頂経』・『蘇悉地経』を不空の翻訳としているようであるが、これは誤りである。了賢も、本条目の後半においてこの道詮の主張を退けている。

【解説】

本条目は、鉄塔相承を問題としたものである。この問題を提起するに当たり、徳一撰『真言宗未決文』「鉄塔疑」、並びに道詮撰『群家諍論』を引用している。

この文において徳一は、真言宗徒は、所依の經典が南天鉄塔の中において金剛薩埵から龍猛に相承されたものであると主張しているが、それは文伝があるのか、口伝のみなのかと問うている。そもそも文伝であるならば、その証文を示せと要求している。この後に、空海撰『広付法伝』巻二の主張に反論する形の文（徳一の手による付加か、後の時代の人物の付加であるのか）の議論がある。筆者は、苦米地誠一氏の

主張する「後人の付加説」(『真言宗未決文』鉄塔疑について「印仏研三一・一九八三、『平安期真言密教の研究』ノンブル社・二〇〇八、第一部に再録)に賛同する立場である)が続き、『瑜伽論』は無著が弥勒より一人で聴受したものであるから信用できない」と辺主(空海を指すと思われる)は主張するが、この無著の事績については『唯識了義灯』などにも記録されている、すなわち文伝があるため信用できるとしている。ただし、この付加された文における辺主の見解は、『広付法伝』の文意を読み違えたものである(この読み違いが稚拙であることから、付加された文が徳一の手によるものではないと主張される一因となっている)。

『広付法伝』では、『瑜伽論』の無著聴受説を批判しているのではなく、「口伝であること」によって鉄塔相承を信用に足らないものとするならば、無著一人で聴受したとされる『瑜伽論』も信用できないものになってしまう。しかし、伝法の聖者は妄語しないため信用すべきであり、無著と同様に金剛智の口説も信受すべきである」と主張しているのである。何はともあれ、『真言宗未決文』における徳一の主張は、鉄塔相承が口伝のみであるならば信用することはできないというものである。

次に引用される道詮『群家諍論』では、真言宗が三論宗の支流であると主張されたり、『大日経』・『金剛頂経』・『蘇悉地経』が不空の翻訳であり、インド・中国に師資相承するとされるも、証文はないとの難が展開されている。さらに、真言宗の報仏説法は法相の説に相似するとし、また真言宗が龍樹を本師とするもその所以は詳らかではないと主張している。

ここに引かれる道詮の主張は、『群家諍論』が散逸したとされて閲覧することができないため、その

批難の全体像を把握することは難しい。ただし、真言宗に対して誤った理解をしていると評価せざるを得ない。そのためであろうか、了賢は本条目の後半に、「一、道詮法師疑事」という項目を設け、道詮の批難一つひとつに対して反論を加えている。

【原文】

問。真言宗経論鉄塔相承可云耶。

答。大師金剛頂略釈云、此経及大日経、并是龍猛菩薩、南天鉄塔中所誦伝経是也文。

【訓読】

問う。真言宗の経論は鉄塔相承すと云うべしや。

答う。大師の『金剛頂略釈』に云く、「此の経及び『大日経』は、並びに是れ龍猛菩薩、南天鉄塔の中より誦伝する所の経是れなり」と文。

【典拠】

(1) 大師の『金剛頂略釈』…空海撰『教王経開題』（弘全一・七一九頁）に「此経及大日経、并是龍猛菩薩、南天鉄塔中所誦出如来秘密藏之根本」とあることを指すと思われるが、了賢は「所誦出」

如来秘密藏之根本」ではなく、「所誦傳經是也」とし、引用文に若干の差異がみられる。この差異について、『弘法大師全集』・『定本弘法大師全集』所収の『教王經開題』には、特に注記はなされていない。またこの『教王經開題』の文は、重誉（？～一一四三）『秘宗教相鈔』巻一〇（大正七七・六三九頁下）、頼瑜（一二二六～一三〇四）『大日經疏指心鈔』巻二（大正五九・五八七頁中）、杲宝（一二三〇六～一三六二）『宝冊鈔』巻五（大正七七・八〇七頁中）、宥快（一三四五～一四一六）『大日經疏鈔』第一本鈔（大正六〇・二頁中）等にも引かれるが、これらで「誦傳經是也」と引用する例はみられない。聖憲（一二三〇七～一三九二）『大疏第三重』巻一（大正七九・六〇六頁下）においても、「誦出如来秘密藏之根本」が「誦傳也」となっており、「經是也」とは引用されていない。したがって、了賢の閲覧した『教王經開題』が、現行流布するものとは異なる可能性も考えられるが、現状では不明である。

【解説】

本条目の初重の問答である。はじめに引用された『真言宗未決文』・『群家諍論』の記述を受けて、問者が真言宗の經典・論書は南天鉄塔において相承されたものであるのかと問う。これに対して答者は、空海撰『教王經開題』の、『金剛頂經』・『大日經』は、龍猛が南天鉄塔より誦傳したものであるとの文を引き、真言宗の所依の經典が鉄塔にて相承されたものであると主張している。

【原文】

難云、今就之凡仏教者皆是釈尊所説故、阿難結集、祖師次第相承。何自鉄塔中相伝之乎。未見経論明文。更不足信用歟。

【訓読】

難じて云く、今之れに就て凡そ仏教とは皆な是れ釈尊の所説なるが故に、阿難結集し、祖師次第に相承す。何ぞ鉄塔の中より之れを相伝せんや。未だ経論の明文を見ず。更に信用するに足らざるか。

【解説】

本条目の二重の難である。問者は、初重における答者の「真言宗の經典は鉄塔相承されたものである」という主張に対し、仏教は全て釈尊の所説であるため、阿難が結集し、その後次第に相承されたものであるにもかかわらず、なぜ真言宗は、南天鉄塔より相伝したものであるのかと難じている。そして南天鉄塔の相承については、経論に典拠を見出すことができないため、信用には足りないものであると主張している。すなわち、徳一が「口伝であるならば信用できない」、道詮が「経論に誠証がない」と主張することと同様の批難を展開しているといえる。

【原文】

答。釈迦・大日各別故、於釈迦遺法者、阿難結集迦葉等傳來。大日經(教力)法者龍猛密機故、開鉄塔傳之。其旨見楞伽文。以釈迦遺法不可疑大日流傳。於鉄塔之事者、金剛智義決、僧祥法華傳分明說之。縱無經論明文、三藏口說誰敢疑乎。

付法伝二云、如汝言、瑜伽論不合信受。何者、斯論者西域記云、如来滅後一千年中有菩薩、名無著。夜昇天宮、於慈氏菩薩所受瑜伽師地論・莊嚴經論・中辺分別論等。……(中略)……無著聞受時、曾無同聞人。何故拳世奉行乎。……(中略)……若不信三藏口說者、玄奘三藏所記西域記等亦不合信。何以故。玄奘三藏遊天竺之日都無從者。随自見聞載之翰墨。緣伝法者不妄語信其事。至西域記者、玄奘非密機故、所見如此。機見不同者顯密之定判。何怪之。是以玄奘(唯)於奄羅林中雖遇龍智不伝真言。又不知真言。相承人、法相相應之機故、遥隔即事而真之密教也。付法伝問答決疑段可見之。但於德一之重難者、文殊空中驚覺是又無同聞衆。以何天竺諸人信之耶。明知、依口說信受者也。此難会釈足初重会通者歟。

【訓読】

答う。釈迦・大日各別の故に、釈迦の遺法に於ては、阿難結集し迦葉等傳來す。大日の教法は龍猛密機の故に、鉄塔を開いて之れを伝う。其の旨は『楞伽』の文に見えたり。釈迦の遺法を以て大日の流傳

を疑うべからず。鉄塔の事に於ては、金剛智の『義決』、僧祥の『法華伝』に分明に之れを説けり。縦い経論の明文無くとも、三蔵の口説を誰か敢えて疑わんや。

『付法伝』⁽⁴⁾ 一二に云く、「汝の言うが如くならば、『瑜伽論』も信受すべからず。何とならば、斯の論は『西域記』⁽⁵⁾に云く、「如来滅後一千年中に菩薩有り、無著と名づく。夜は天宮に昇り、慈氏菩薩の所に於て『瑜伽師地論』・『莊嚴経論』・『中辺分別論』等を受く。……（中略）……無著聞受の時、曾て同聞の人無し。何が故ぞ世を挙げて奉行せんや。……（中略）……若し三蔵の口説を信ぜずんば、玄奘三蔵所記の『西域記』等も亦た信すべからず。何を以ての故に。玄奘三蔵、天竺に遊ぶの日に都て従者無し。自らの見聞に随つて之れを翰墨に載す。伝法者の妄語せざるによつて其の事を信ず」と文り。『西域記』に至つては、玄奘は密機に非ざるが故に、所見此の如し。機見の不同は顕密の定判なり。何ぞ之れを怪しまん。是を以て玄奘は菴羅林中に於て龍智に遇うと雖も真言を伝えず。又真言を知らず。相承の人、法相相應の機なるが故に、遙かに即事而真の密教を隔つなり。『付法伝』の「問答決疑段」之れを見るべし。但し徳一の重難に於ては、文殊の空中驚覺は是れ又同聞衆無し。何を以て天竺の諸人之れを信ぜんや。明かに知んぬ、口説に依つて信受するものなり。此の難の会釈は初めの重の会通に足るものか。

【典拠】

(1) 『楞伽』…菩提流支訳『入楞伽經』卷九（大正一六・五六九頁上）に、「我乘内証智、妄覺非二境界一

如来滅世後、誰持為我説。如来滅度後、未來当有入。大慧汝諦聽。有人持我法。於南大国中有大德比丘、名龍樹菩薩。能破有無見、為人説我乘大乘無上法。証得歡喜地、往生安樂国」とあることを指す。空海も『広付法伝』巻一（弘全一・六頁）において「楞伽經及魔訶摩耶經等、釈迦如来所懸記、則是其人也」としたうえで、この『入楞伽經』の文を引用している。

(2) 金剛智の『義決』…金剛智口・不空記『金剛頂經大瑜伽秘密心地法門義訣』巻上（大正三九・八〇八頁上中）に、「其大經本、阿闍梨云、經夾広長如床、厚四五尺有無量頌、在南天竺界鉄塔之中。仏滅度後數百年間、無人能開此塔。以鉄扉・鉄鎖而封閉之。其中天竺国仏法漸衰。時有大德、先誦持大毘盧遮那真言、得下毘盧遮那仏而現其身及現多身、於虚空中説此法門及文字章句。次第令写訖即滅。即今毘盧遮那念誦法要一卷。是時此大德持誦成就願開此塔。於七日中遶塔念誦。以白芥子七粒打此塔門乃開。塔内諸神一時踊怒、不令得入。唯見塔内香灯光明一丈二丈、名華宝蓋滿中懸列。又聞讚声讚此經王。時此大德至心懺悔發大誓願、然後得入此塔中。入已其塔尋閉。經於多日讚此經王広本一遍為如食頃。得諸仏菩薩指授所堪記持不忘。便令出塔塔門還閉如故。爾時書下所記持法上有百千頌。此經名『金剛頂經』者、……（以下略）」と、『金剛頂經』が鉄塔中より誦出されたことを指す。次注（3）とあわせて、『金剛頂經』と『大日經』が、ともに鉄塔より誦出されたことの根拠として示されていると考えられる。

(3) 僧祥の『法華伝』・僧祥撰『法華伝記』卷一〇（大正五一・九五頁中）に、「昔外国有鉄塔。高丈餘。於中安置芬陀利迦・阿差摩・摩訶毘盧舍那経等梵夾。各有百千偈」と、『大日経』が鉄塔中に安置されていたとあることを指す。前注（2）とあわせて、『金剛頂経』と『大日経』が、ともに鉄塔より誦出されたことの根拠として示されていると考えられる。

(4) 『付法伝』一・空海撰『広付法伝』卷二（弘全一・四七頁）。

(5) 『西域記』・玄奘『大唐西域記』卷五『阿踰陀国』（大正五一・八九六頁中）の欄に、「城西南五・六里、大菴没羅林中有故伽藍。是阿僧伽嚕菩薩請益、導凡之处。無著菩薩、夜昇天宮於慈氏菩薩所、受瑜伽師地論・莊嚴大乘経論・中辺分別論等、昼為大衆講宣妙理。菴没羅林西北百餘步有如来髮爪窠堵波。其側故基、是世親菩薩從觀史多天、下見無著菩薩处。無著菩薩健馱邏国人也。仏去世後一千年中、誕靈利見、承風悟道、從彌沙塞部出家修学、頃之迴信大乘」とあることを指す。

(6) 玄奘・冥詳撰『大唐故三蔵玄奘法師行状』（大正五〇・二一五頁下）に、「次到磤迦東境有大菴羅林。林中有二七百歳婆羅門。觀其面貌可称三十許。明中・百論及吠陀書。云是龍猛弟子法師。就停一月、学經・百論」とあり、玄奘が大菴羅林において龍猛の弟子である七百歳の法師に出会い、一月学んだことが記されている。また、『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』卷二（大正五〇・二三三頁上）においても、「明日到磤迦国東境至一大城。城西、道北有大菴羅林、林中

有_二七百歲婆羅門_一。及_レ至觀_レ之可_二三十許_一。質狀魁梧神理淹審。明_二中・百諸論_一、善_二吠陀等書_一。有_二侍者_一、各百餘歲。法師与相見、延納甚歡。又承_レ被_レ賊、即遣_二侍者_一、命_二下城中信_二弘法_一人_上令_下為_二法師_一造_レ食。其城有_二数千戸_一、信_レ仏者蓋少、宗_二事外道_一者極多。法師在_二迦濕弥羅_一時、声誉已遠、諸国皆知。其使乃遍_二城中_一告唱云、支那国僧來。近処被_レ賊衣服總尽。諸人宜_二共知_レ時。福力所_レ感、遂使_二邪黨革_レ心。有_二豪傑等三百餘人_一、聞已各將_二斑斕布一端_一、并奉_二飲食_一恭敬而至。俱積_二於前一拜跪問訊_一。法師為呪願、并説_二報応因果_一、令_下諸人等皆發_二道意_一、棄_レ邪歸_レ正。相对笑語舞躍而還。長年歎_二未曾有_一。於_レ是以_二斕布一分_一給諸人、各得_二數具_一、衣直猶用_レ之不_レ尽。以_二五十端布_一奉_二施長年_一。仍就停一月、学_二經・百論・広百論_一。其人是龍猛弟子。親得_二師承_一説、甚明淨」と、『大唐故_二三蔵玄奘法師行状_一』と同様の記述が確認される。これらの記述に基づき、空海は『広付法伝』巻一（弘全一・九頁）において、「以此觀_レ之、玄奘_三蔵亦是龍智菩薩之弟子也」と、玄奘が龍智の弟子であると記している。

(7) 『付法伝』の「問答決疑段」…前注(4)の空海撰『広付法伝』巻一（弘全一・四七頁）こと。

(8) 文殊の空中驚覺…徳一が『真言宗未決文』において引用した、恵沼『成唯識論了義灯』巻一本（大正四三・六六六頁中）の文、『安達羅国王、請_二陳那菩薩証_一無学果。菩薩撫_レ之欲_二遂_二王請_一。文殊師利、於_二虚空中_一彈指驚曰、云何捨_二大心_一而期_二小果_一」を指す。

【解説】

二重の難を受けて、答者は、釈尊と大日如来が別体であるため、その伝法も異なると主張する。釈尊の法は阿難が結集し迦葉等が伝え、大日の法は、密機である龍猛が南天鉄塔を開いて流伝したものであるとその相違を指摘している。その根拠として、『入楞伽經』卷九に「如来の内証智・大乘無上の法を、龍樹（龍猛）が人のために説くであろう」という旨の文があることを示し、大日の法の流伝を、釈尊のそれに則って理解するべきではないと論じている。また、鉄塔相承の事績については、『金剛頂經義訣』や『法華伝記』において説かれているため、経論に鉄塔相承についての言及がなかったとしても、金剛智等の三蔵の口説を疑うべきではないとしている。

ここで空海『広付法伝』に、「汝（溺派子、徳一を指すとされる）が鉄塔相承は同聞衆がいなかったため信用できないというのであれば、『瑜伽師地論』も信用できないことになってしまう。なぜならば、『瑜伽論』は『西域記』によれば、如来滅後一千年に無著菩薩が夜は天に昇つて弥勒のもとで『瑜伽師地論』・『莊嚴経論』・『中辺分別論』等を受ける。無著が弥勒より聞受した際に同聞の人はいなかったが、どうして世の人々はこれらの論書を信奉するのだろうか。さらに、もし三蔵の口説を信用しないのであれば、玄奘三蔵の『大唐西域記』等も信用できないものになってしまう。なぜならば、玄奘三蔵がインドに遊学した際に、三蔵に従者は一人もおらず、すべて三蔵一人が見聞いたことを記録したものが『西域記』である。仏教を伝法した聖者が妄語するはずはないので、『西域記』の記述を信用できるのである」とあ

ることを示し、同聞衆がないことを根拠に鉄塔相承を疑ってはならないと指摘している。

この後に、『西域記』に至っては……」とあることの意味が不明瞭であるが、玄奘が密機ではなく法相に相応する機であったために、菴羅林において龍智に見えたものの密教を相承されなかったため、『西域記』に密教に関する記述（龍智《七百歳の婆羅門》に出会った記述）がないということであろうか。

最後に、『真言宗未決文』では、『成唯識論了義灯』の「安達羅國土は陳那に無字果を証するように要請し、陳那が王の要請を遂げようとしたところ、文殊が虚空において彈指し、小果を期するのではなく、因明を製し、慈氏所説の『瑜伽論』を弘めよと驚覚した。菩薩はこれを受けて『正理門論』を製した」という文を引いて、この事績は五天竺に周遍し、一人として知らないものはいないため、信用するべきであると説かれているが、そもそも文殊の驚覚を受けた陳那に同聞衆はいない。では、なぜ天竺の人々がこれを信用しているのかと言えば、口説を信用しているからにはかならないからであると主張する。そして、この同聞衆がない記述を『真言宗未決文』で信用しているのであれば、鉄塔相承の口説も信用できるはずであると回答している。

註

- 1 『仁和寺史料』「寺誌編一」二二二頁（吉川弘文館・二〇一三）。
- 2 『仁和寺史料』「寺誌編一」三三八頁（吉川弘文館・二〇一三）。
- 3 この「毛利時賢」と「毛利親宗」が如何なる人物であるのかは不明であり、同一人物であるのかも不明である。尚、了賢の

事績等については『密教大辞典』や『真言宗全書』解題「著者略伝」（三三九頁上～三四〇頁上）に詳しい。

4 『真言宗全書』解題（二二六頁下～二二九頁下）。

5 『他師破決集』巻二（真全二一・二五八頁上）。

6 『他師破決集』巻五（真全二一・三〇八頁下）。

7 『真言宗全書』解題では、「大覚寺殿」を「性円親王歟」と推測している（二二九頁上）。

〈キーワード〉了賢、『他師破決集』、真言宗鉄塔相承耶事、徳一、『真言宗未決文』